

美術の窓(94)

岡田為恭筆「伊勢物語八橋図」

—特別展「復古大和絵師 為恭」によせて—

大和文華館館長 水田 徹

「伊勢物語」は在原業平と擬される主人公「昔男」の元服から臨終までの浪漫に満ちた一生を、主人公あるいは他の登場人物の詠む和歌を軸に短編集風に綴ったもので、平安時代に成立して以来、王朝貴族社会で「源氏物語」に並び愛読され、また鎌倉・室町時代にも数多くの注釈書の出現が示すように、日本古典文学の傑作としての地位を保ち続けた。そして江戸時代初頭に絵入り版本として刊行されるや（「嵯峨本 伊勢物語」）市井にも広まり、とりわけ第九段「東下り」は、幕府が京から江戸に移り東西の往来が繁くなるにつれ、旅文学としても人気を博することになる。

そんな東下りの一景「八橋」を描いたのが岡田為恭筆「伊勢物語八橋図」（本館蔵、本号表紙（部分図）・表紙のことは（全図）参照）である。以下、江戸時代初期の住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」（個人蔵、図1）、90年遅れて尾形光琳が描いた「八橋図掛幅」（東京国立博物館蔵、図2）と比較しつつ、為恭作品の特徴を検討してみよう。

「八橋」は業平一行が東下りの途上、三河国八橋で休息中、河畔に咲く燕

子花に因んでかきつばたの五文字を句の上に据え、から衣きつなれにしつしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふと業平が都への想いを詠えば、連れはみな感極まり乾飯の上に落泪するという物語。それを如慶、光琳、為恭とも乾飯を囲む業平一行と河畔の燕子花、板橋の組み合わせで図像化しているが、描き方はそれぞれ大きく異なる。

まず人物の姿態と員数。如慶は業平を中心に車座する五人の一人が川岸の花に目を落とし、右辺の一人は画面右端で荷を解く従者たちに話しかけ、一方光琳は人物を三人に絞り、全員が身ぶり大きく河畔を振り向く。これに対し為恭の人物は誰一人花に目を遣らず、連れの二人は俯き（落涙し）、それを気遣うように業平は左手を挙げる。如慶が物語を筋通りに追い、光琳が奇抜ともいえる意匠で物語の核心を抽出するのに対し、為恭の狙いは登場人物の心情表現にあったと解釈できよう。

人物の寸法、人物と回

(図1) 伊勢物語絵巻、住吉具慶、個人蔵



(図2) 八橋図、尾形光琳、東京国立博物館蔵



りの風物との釣り合わせ方も三者三様である。如慶と光琳の人物はそれぞれ皆ほぼ同じ寸法であるが、為恭は業平を一回り大きく描き（顔も白く着彩）主人公を明示する。

回りの風景との関係は、如慶は事物すべてを中景に収め、人物と橋や木々の大きさも程良く釣り合う。一方光琳は人物をクローズアップし、さらに大きく燕子花と板橋を描く。前者が鎌倉時代以来の伝統的な絵巻画法に忠実に従い、光琳は第二の主役ともいべき花と橋にも焦点を当てたのである。

為恭の図も幾重にも工夫が凝らされている。まず光琳はもとより如慶に比べ遥かに広く風景を捉え、かつ川を大きく蛇行させ、その先端に遠景を配することによって画面に強く遠近感を醸す。鳥瞰図とも言えるこの構図法を為恭は日本古来の絵巻物などから学び、同じ画法を掛幅でも多用するが、ここではそうした伝統画法の援用に加え、遠近の強調を旅路の遙かさと重ね合わせ業平の心情を巧みに表現したとすることが出来る。

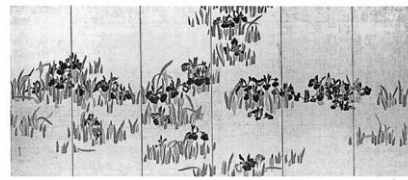
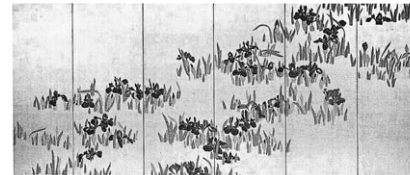
一方、風景を広く鳥瞰すれば画中の人物はそのぶん小振りになる。そこでまず為恭は人物の寸法を不自然に見えぬ限界まで拡大する。鳥瞰と拡大のこの絶妙のバランスを為恭は本図制作直前に松平・徳川家の菩提寺である大樹寺で手掛けた襖絵で会得したと思われる。その大方丈の

上段および下段の間の四周に描かれた二つの王朝故事図は、いずれも正面から北西南面の順に遠景から中景、近景と視点を変え、次第に人物に焦点を合わせていくのである。我々の「八橋図」はその構図法を一幅の絵の中で大胆かつ破綻なく展開させたと言えよう。

為恭のいま一つの工夫は燕子花の表現にある。大構図であるが故に花も小さくなるのは分かるとして、それを木立や霞に半分隠して描いてあり、如慶や光琳の花の捉え方とは大きく異なる。この一見奇異な描法の謎を解く鍵はこの掛幅の表装にある。表装部も筆で描くいわゆる描き表装の技法を用い、しかもその文様を一般的な雲文や唐草文ではなく燕子花にすることによって、絵の中の花の寸法と配置を自然のままに保ちつつ、物語の主役のひとり燕子花も見事に強調して見せたのである。

この表装部の花の配置は江戸中期の画家渡辺始興の「燕子花図屏風」（クリーブランド美術館蔵、図3）に近い。始興の古典研究については五年前の特別展「渡辺始興」でご紹介申し上げた。同じく古典研究に徹し、人間の心情表現という点でも幕末の復古大和絵師と称するにふさわしい為恭の芸術を、「始興展」同様中部義隆氏が企画する今回の特別展でじっくりご観賞頂ければ幸いである。

(図3) 燕子花図屏風、渡辺始興、クリーブランド美術館蔵



季刊 美のたより No.152

平成17年10月 8 日

発行 大和文華館